ドン・キホーテ論

三 浦 良 著

目　　次

１ラ・マンチャ地方～ドン・キホーテの故郷～　・・・・・・・・・3

2 二人のドン・キホーテ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

（1）ミュージカルの「ラ・マンチャの男」
（2）原作とミュージカルの違い
（3）ドン・キホーテの魅力

3 ドン・キホーテ成功の秘密・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

（1）スペインに蔓延する騎士道物語
（2）計算違いの思わぬ賞賛がセルバンテスに舞い込む
（3）狂気と正気の間を彷徨うドン・キホーテ

4 ドン・キホーテはスペインの運命を戯画化・・・・・・・・・・・・16

（1）スペインの黄金時代
（2）セルバンテスはスペインの黄金時代から没落期までの両方を生きた人
（3）ドン・キホーテの奇行は過去のスペインの栄光に対する戯画化

5 誇大妄想が世界を巻き込む・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

（1）サンチョ・パンサは我々の姿ではないか
（2）三度目の遍歴で妄想に対する騎士と従者の関係が逆転
（3）ドン・キホーテを笑えない

6 死の間際で正気に戻ったドン・キホーテ・・・・・・・・・・・・・25

（1）ドン・キホーテの偽作に遭遇
（2）「銀月の騎士」との決闘に敗れて故郷へ帰る
（3）ドン・キホーテの死

１　ラ・マンチャ地方　～ドン・キホーテの故郷～

マドリッドの南に広がるカステイーリヤ・ラ・マンチャの大平原が、ドン・キホーテの故郷である。小説では具体的な地名を言ってないが、思い姫・ドルシネアの家、愛馬ロシナンテに乗って突進した風車、騎士叙任式をした宿など、その真偽は別にして、あちこちで見ることが出来る。

トレド（Toredo、ポイントB）

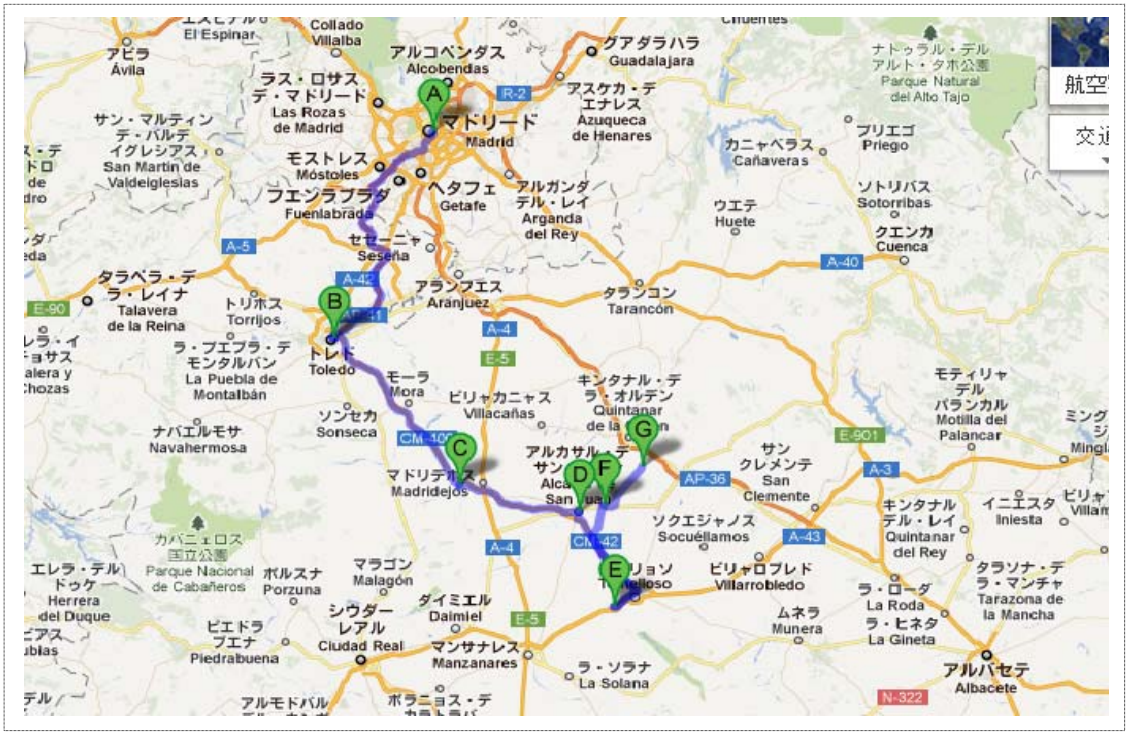
マドリッドから南へ約 70ｋｍ。小麦畑が続く平坦で快適な自動車道路を約 1 時間走るとトレドへ着く。この物語が書かれた 16 世頃まで、トレドは西ゴート王国の首都だったため、タホ川に囲まれて中世の面影を色濃く残した街である。物語では、トレドが舞台になる場面はないが、当時は首都だったので、絹織物を扱うトレドの商人たち、トレドの町へ向かう馬方たちというように、国の都で商売が盛んな町として登場する。

コンスエグラ(Consuegura、ポイントC)

トレドから南へ約 70ｋｍ、ぶどう畑の道を南下する。褐色の丘の上に 9 基の風車が並び、古城もある。風車内の見学も可能で、土産物を売る店もある。この小高い丘からみるラ・マンチャは、白い家が点在する雄大な風景である。

アルカサール・デ・サン・ファン（Alcazar de S.Juan、ポイントD）

ラ・マンチャ地方の中心部で、鉄道もあり、観光の拠点になっている。銀行、レストラン、バー、スーパーなども一通りそろっている街である。



カンポ・デ・クリプターナ(Campo de Criptana、ポイントF)

アルカサールの町から西へ約7㎞。乾いた褐色の大地に、白い家々が立ち、小高い丘の上に10基の風車が立っている。 二回目の遍歴で、ドン・キホーテが巨人プリアレーオだと思い込んで戦いを挑んだ風車である。物語では30～40基の風車があったという。現在は10基あって、うち1基は昔のように粉ひき用に復元されている。

エル・トポーソ（El Toposo　ポイントG)

アルカサールから西へ約 30ｋｍ。三回目の遍歴でドン・キホーテは、思い姫ドルシネアが住んでいるエル・トポーソへ向けて出発する。そのドルシネアの館には寝室や調度品があって、昔の暮らしを楽しく見ることが出来る。

アルガマージャ・デ・アルバ（Argamasha de Alba　ポイントE)

アルカサールからＣＭ－42号線を南へ約35ｋｍ位下る。著者は明言してないが、この村の「メドラノの家」の地下牢に投獄され、物語を着想したので、ドン・キホーテの出身地と言われている。この町の南東約 20ｋｍに「モンテシーノスの洞穴」がある。また、この町の南一帯は「モンテイエルの野」、その西側の山岳は「シェラ・モレーナ山脈」である。

コンスエグラの丘からみたラ・マンチャの風景。赤茶けた地面、白い家がどこまでも続く。雨が少なくて、一見して荒野のように見えるが、ここではサフランと夏のひまわりが収穫されると聞いた。

2　二人のドン・キホーテ

(1)ミュージカルの「ラ・マンチャの男」

映画化されたミュージカル「ラ・マンチャの男」を見た。1965 年にブロードウエイで上演されたミュージカル「ラ・マンチャの男」(デイル・ワッサーマン脚色)を映画化したものである。ミュージカル「ラ・マンチャの男」は、人間の尊厳と真の正義のために、困難でも立ち向かう勇気を奮い、信じる道を行く男の物語である。「ラ・マンチャの男」では、たとえ「見果てぬ夢」であっても、夢に向かって力強く邁進する男のロマンが強調されている。

「ラ・マンチャの男」は冒頭、セルバンテスが教会を冒涜した罪で牢獄へぶち込まれ、宗教裁判を受けることから始まる。牢獄へ入ると、宗教裁判の前に、牢内で囚人たちによる模擬裁判を受けることになる。もし有罪の時はその所持品（「ドン・キホーテ」の台本）を焼いてしまうという。早速、模擬裁判が開かれて、検事役からセルバンテスが正直者の罪で有罪が求刑されると、セルバンテスは得意な即興劇で申し開きをさせてほしい、ついては他の囚人たちもその劇に参加してほしいと頼み、了承されて、劇中劇「ラ・マンチャの男」が始まる。

甲冑に身を固めたドン・キホーテと従者サンチョ・パンサが遍歴の旅へ出発する。
初めに風車に出会うと、これを巨人と思って風車へ突進して大怪我をする。次に宿へ行くとこれを城と思い、さらに宿の女中で売春婦のアルドンサを「思い姫」のドルシネア姫と見立てて崇めた。アルドンサもはじめはドン･キホーテを馬鹿にしていたが、次第に彼に惹かれるようになる。

他方、ドン・キホーテの故郷では、姪のアントニアが、婚約者サンソン・カラスコ博士と神父にドン・キホーテを連れ戻すよう頼み、二人は旅に出る。

アルドンサを追いかけてきたラバ追い達と決闘し、打ちのめされ、アルドンサも彼らに誘拐されてしまう。ドン・キホーテは城主カステリアーノ卿（実は宿の主人）に騎士の称号授与してほしいと頼み、「憂い顔の騎士」の称号を受ける。カラスコ博士と神父は、宿屋でドン・キホーテと会うが、狂気を直すには故郷へ戻すしかないと考える。

その時、劇中劇が中断して、セルバンテスが独白する。夢におぼれて現実を見ないのは狂気、現実におぼれて夢を持たないのも狂気。だが一番憎むべき狂気は、あるがままの人生に折り合ってしまって人生が狂っているのにあるべき姿のために戦わないことだ、と。

劇が再開されて、カラスコ博士が鏡の騎士に扮して、ドン・キホーテに決闘を申し込む。鏡の騎士の持つ鏡に映った自分の姿を見て、主人公は我に返り、正気になる。

決闘の条件に従って自宅へ戻ると、病床につく。そこへアルドンサやサンチョ・パンサがやってきて、また夢を追いかけて出直そうという。それを聞いていた主人公が、そうだ行こう、と決心した時、臨終に陥る。

この映画では、絶世の美女・ソフィア・ローレンが娼婦でかつドルシネア姫のアルドンサ役で登場するのも楽しいが、全編を通じて流される主題歌の「見果てぬ夢」が力強くてとても楽しい。その歌は、見果てぬ夢に向かい社会の悪や不合理に戦いを挑んでひるまない、ラ・マンチャの男を称えて、人を元気にさせることが楽しい。

映画「ラ・マンチャの男」は 1972 年にイタリアで制作された。1955 年にデイル・ワッサーマンがセルバンテスの「ドン・キホーテ」を脚色しミュージカルになったものを映画化した。1965 年に初演されたミュージカルは好評で、1968 年から 1971 年までブロードウエイでロングランが続いた。日本では 1970 年から松本幸四郎主演で公演された。映画では、ピーターオツール、ソフィア・ローレンら豪華メンバーが出演し、ラストの「見果てぬ夢」の大合唱が注目を浴び、好評を得た。

The Impossible Dream

To dream the impossible dream, To fight the unbeatable foe
To bear with unbearable sorrow, To run where the brave dare not go
To right the unrightable wrong, To be better far than you are,
To try when your arms are too weary, To reach the unreachable star.
This is my quest to follow that star.
No matter how hopeless no matter how far
To be willing to give, when there's no more to give
To be willing to die so that honor and justice may line

And I know. If I'll only be true to this glorious quest
That my heart will lie peaceful and calm
When I'd laid to my rest
And the world will be better for this
That one man scorned and covered with scars
Still strove with his last ounce of courage
To reach the unreachsble stars.

見果てぬ夢

見果てぬ夢をみて、勝てない敵と戦い
苦しい悲しみに耐え、勇者すら立ち向かわないところへも駆けつける
直し難い過ちを正して、今よりも少しでも良くなるように
腕が疲れ果てても挑み、到達不能と思われる星にも届くように
これがあの星に従う私の冒険の旅

どんなに希望がなくても、どんなに遠くても
喜んで与えよう　もはや何もなくなってしまっても
喜んで死のう　名誉と正義のためにならば

私は知っているぞ　もしもこの名誉ある旅が誠実に全うできれば
私が休息して横たわる時　心には平和と静けさが宿るだろう
そうしたら世界は今より良くなるだろう
軽蔑されて、傷だらけになった一人の男は
最後の勇気を振り絞って　なお努力する
届くことができない星へ届こうして

(2)　原作とミュージカルの違い

原作では、騎士道物語に感化された初老のドン・キホーテが、村娘アルドンサをドルシネアという「思い姫」に見立てて各地を遍歴する。これに対して「ラ・マンチャ」は、城と思い込んだ旅宿を舞台とする話が中心で、あれこれの冒険はしない。ここでは「思い姫」のドルシネアは宿の女中で売春婦もするアルドンサに変わっている。「思い姫」は、原作では貴婦人で美貌の女性だが、ミュージカルでは原作よりもずっと象徴的な「希望の星」になっている。その結果、ドルシネアを思うドン・キホーテは夢を追う男として強調されている。

また、ドン・キホーテを連れ戻す役目の司祭のペロ・ペレスと床屋のニコラス親方、学士のサンソン・カラスコが、「ラ・マンチャ」では神父と姪のアントニアの婚約者サンソン・カラスコに変わっている。少しずつ配役が違うことで「ラ・マンチャ」は原作に意識的な脚色を加えている。また、配役は違わないが、その役回りにも違いがある。原作では、サンチョ・パンサは正直ものだが少し知恵が足りない村人で、島の王様にしてやると言われて従者になった人である。しかし、一緒に旅をする中で、彼は主人が狂気の時は現実主義に立ち、正気の時は主人以上に見果てぬ夢を語るという重要かつ魅力的な人物である。しかし、ミュージカルではサンチョはすでに狂気に取り込まれてしまった人物で、主人の狂気を周囲に振りまいて感染させる役割になっている。

また、原作では、サンソン・カラスコは司祭や床屋のニコラスと相談して主人公を故郷へ連れ戻し治療させたいと考える中心人物で、1 度目の「鏡の騎士」では失敗し、2 度目の「銀月の騎士」で決闘に勝利して帰郷させる。 ミュージカルでは、カラスコは姪の婚約者で、姪に頼まれて「鏡の騎士」になる。

さらに、原作では主人公は三回、遍歴の旅へ出るが、ミュージカルでは一度だけである。原作では一回目の遍歴は一人旅である。その夜、泊った城(実際は宿)で騎士叙任式をするが、騎士は従者を連れていく必要があると言われて、僅か三日間で自宅へ戻る。二回目の遍歴は、従者サンチョ・パンサを連れた約二カ月にわたる冒険の旅である。騎士道の妄想で頭がいっぱいになった主人を、従者サンチョが絶えず現実に引き戻す。三回目の遍歴は約四カ月になるが、その趣は異なる。これまでの遍歴が本になって出版されて(「前篇」と言う)、多くの人々に読まれて好評を得ているという設定である。主人公は狂気から覚めて正気の人間として、不合理や悪と戦う人である。正気のドン・キホーテには人や物を見て最早妄想を高めることはない。

例えば、侯爵夫妻の城へ招かれる。その夫妻はすでに「前篇」を読んでいて、騎士道物語にならって騎士らしくもてなすようにあれこれと細工する。これまではドン・キホーテの妄想が周囲のものを欺いたが、今度は周囲の者たちによって欺かれるようになる。しかし、ミュージカルではそうした段階的に物語を深化させる手法はとらないで、初めから狂気と正気、夢と現実の枠組みが作られていて、これでもかこれでもかと夢を追い続ける狂気の男の話が進められていく。

原作が主人公をあちこちへ冒険の遍歴をさせるのは、スペイン社会に広く狂気が蔓延していることを読者に気付かせるために他ならない。このように原作が、当時のスペインの時代背景を色濃く反映した作品であるのに対して、ミュージカルの方はそうした時代背景をあまり考慮せず、狂気と正気の間をさまよい歩いたドン・キホーテの人間性の追求を強調した作品になっているためと思われる。

（参考） 原作とミュージカルにおける主な登場人物の違い

	原作	ミュージカル
ドン・キホーテ	本名アロンソ・キハーノ。主人公。「愁い顔の騎士」、「ライオンの騎士」とも呼ばれた。	本名アロンソ・キハーナ。主人公
サンチョ・パンサ	同じ村の農夫で従者になる。無智だが諺に長け、評論家風の面をもつ。	人のいい従者
ドルシネア・デル・トポーソ	村娘で本名アルドンサ・ロレンソ。主人公の思い姫。	宿屋の娼婦
姪	主人公の姪で、本名アントニア・キハーナ。	主人公の姪だが、カラスコ博士の婚約者

司祭	本名ペロ・ロペス。友人で正気に戻す策を立てる	神父
ニコラス親方	床屋で、主人公の友人	
サンソン・カラスコ	後篇で登場する主人公の友人。学士。主人公を家へ戻すために「鏡の騎士」「銀月の騎士」に扮して決闘。	博士で、姪のアントニアの婚約者。「鏡の騎士」

(3) ドン・キホーテの魅力

ミュージカルのドン・キホーテは、見果てぬ夢を追い続ける男である。夢に向かって一直線に突き進む「ラ・マンチャの男」のロマンにある人々はしびれ、ある人々は共感を抱く。これに対して、原作のドン・キホーテは、騎士道物語に書かれていることを真実と信じて騎士道を実践する人物である。彼の眼にはごく日常的な物事がことごとく騎士道物語の一シーンとなって映っているようで、騎士道を実践すればするほど、現実世界との衝突が発生する。その徹底ぶりが面白く、ひょっとしたら狂気に陥っているのはドン・キホーテでなく、自分たち自身ではないだろうかと思わせるほどである。

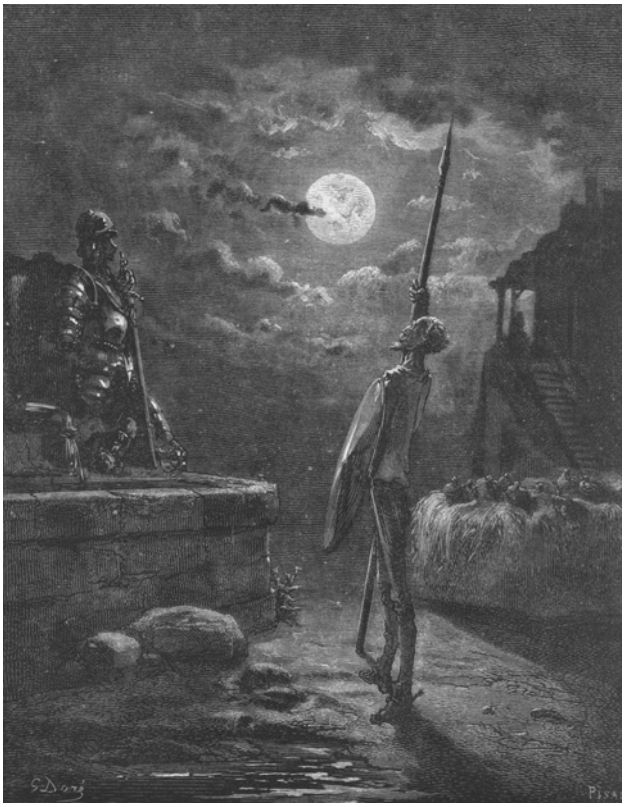
われわれの周囲には、騎士道を忠実に信奉して生活信条にしているドン・キホーテをみて、幕末期の新撰組の人々、特に近藤勇や土方歳三を連想して、腕っ節が強いうえに武士道の大義に殉じた人たちを連想して、ドン・キホーテの場合と同じロマンを感じる人もいる。だから、これを現代日本で読み直す時には、今の日本でドン・キホーテがどういう感動を与える作品になっているかが絶えず検証されていかねばならない。

たとえば、高度経済成長期の日本だったら、狂気に陥った人が巻き起こす面白いギャグとして読む人が多かっただろう。今日のように、世界一流の経済発展国になった日本だったら、夢を追いかける人の空想話として読むことだってできるだろう。或いは、メタボに苦しむ人にとっては、どうして 50 才の彼があんなに痩せていられるのかと思う人もいるかもしれない。

それまで元気だった人がある日突然ボケて、意味不明なことを言いながら周囲を徘徊することがある。要するに、現在の日本では最後の時になって人が狂う例が多い。しかし、ドン・キホーテの場合は、最後になって正気に戻り、多くの人に見守られながら、キチンと遺書を書いて死んでいく。「見果てぬ夢」のように、今の日常が実は狂気で、一生懸命に狂気を追い続けて、最後に夢を実現して心を平常心を得ることが出来るようになって、正気に戻るという見方がここにある。「狂気と正気」に焦点を当てれば、現在の日本と順序が逆であるのも十分現実的だ、という読み方だってできそうである。

私は、ドン・キホーテを、16 世紀に世界の覇者だった大国スペインがイギリスとの戦争にも敗れて次第に落ちぶれて行った時に、古き良きスペインの栄光を歌った物語として読んでみたいと思う。1605 年にこの本が出版された時、スペインの人々はこの本を熱狂的に支持したという。それがなぜだったのか。その為には、スペインではなぜ騎士道という狂気がかくも深く人々の心に入りこんでしまったか、その時代背景やその後も経過も知りたいし、スペインという国の栄光とその後の凋落を懐かしく思い出すような物語として、当時の人々が支持したのかもしれない。

コンスエグラ近くのお土産やの前に立っているドン・キホーテ像。呼び込みもけばけばしい看板もない店がうれしい。



当のドン・キホーテは悠揚迫らぬ物腰で、水甕の周りを歩き回っていたが、時として立ち止まっては、槍を杖にして身をもたせかけたまま、甲冑にじっと目を注ぎながら、一晩中、甲冑の番をした（第 3 章、74Ｐ）。この絵は仏の挿絵画家ギュスター・ガレの挿絵だが、世界中の人々にドン・キホーテのイメージとして定着している。主人公はやがて 50 才になろうとする郷士で、骨組みはがっしりだが、痩せて頬がこけた人と著者は描いている（第 1 章 44Ｐ）。痩せて体力もなく、力も弱いので、主人公は初めから騎士にふさわしくない人として設定されていて、ガレもその意図を十分くんで、絵にしているのが面白い。

3　ドン・キホーテ成功の秘密

(1)　スペインに蔓延する騎士道物語

セルバンテスは、「前篇・序文」で、騎士道物語が世間で受けている権勢と名声を打倒することが執筆の動機だった、と述べている。騎士道は、13 末C～14 末Cにイタリアで始まったルネッサンス運動の中では、中世の象徴として批判されてきた。しかし、騎士道精神の活躍で一旦は世界制覇まで駆け上ったスペインでは、その後オランダやイギリスにしてやられて下降期に陥った 16 世紀になってもなお、騎士道精神は、多くの人々に支持されてその残滓が社会のあちこちにはびこっていたと思われる。16C 中葉から末期に至って、セビリアの商人たちの繁栄にもかかわらずスペイン経済全体が急速に衰退する中で、多くの人々は昔の繁栄した時代をもう一度復活させたいと望み、騎士道物語の時代を懐かしく思い出して、住民を苦しめる悪魔や巨人を倒してほしいと念願していたのではないかと思われる。

スペインとセルバンテス関連年表

年	スペイン	セルバンテス	
1492	コロンブス、アメリカ大陸発見		
〃	スペイン王国、レコンキスタ完了		
1498	バスコ・ダ・ガマ、インド到達		
1521	コルテス、メキシコ征服		
1522	マゼラン、世界一周		
1531	ピサロ、ペルー征服		
1547		0	セルバンテス、マドリッド郊外で誕生
1571	レパントの海戦(スペイン無敵艦隊、オスマントルコを破る)	24	セルバンテス、レパントの海戦へ参加
1575		28	セルバンテス、捕虜になりアルジェ連行(1580 年身代金を払って救出)
1581	オランダ、スペインから独立を宣言		
1588	スペイン無敵艦隊、イギリスに敗北		
1597		50	銀行破産に連座して投獄
1600	イギリス、東インド会社設立		
1602	オランダ、東インド会社設立		
1605		58	ドン・キホーテ前篇刊行
1615		68	ドン・キホーテ後篇刊行
1616		69	セルバンテス逝去(シェークスピアと同日)

騎士道物語とは、11～15Cの中世ヨーロッパで流行った騎士の武勲や恋愛をとりあげた小説である。もともとは「騎士」の武者修行について書かれたが、「アーサー王物語」のように、次第に「騎士」が見知らぬ土地を遍歴し、住民を苦しめる悪魔や巨人を倒して、王様にその武勲を認められる物語に変化して行った。

「騎士」とはどういう人々を指すのだろうか。中世ヨーロッパでは騎兵が戦争の主役であり、騎兵で戦う戦士が「騎士」と呼ばれた。しかし、騎兵が全員「騎士」だったわけでなく、「騎士」になるには貴族階級の出身、強靭な体力、優れた技量、熱心なキリスト教徒などが重要な条件だった。貴族がひとかどの「騎士」として名乗りを上げるためには、国王又は領主によって叙任されること、勇気、武勇があること、それらに加えてキリスト教に基く忠誠、公正、慈愛、寛容、礼節、奉仕といった「騎士道精神」を有することが必要だった、といわれている。

こうした「騎士」の代表例がテンプル騎士団である。イスラム勢力討伐と聖地奪還のために 11C～13Cにかけて 7 回行われた十字軍遠征において最も活躍した騎士団の一つである。テンプル騎士団は、聖地奪回の戦いで活躍した騎士の中から、聖地奪回後の巡礼者保護を目的に結成された。この騎士団の特徴は、軍事組織であるとともに、入会時に個人財産の寄贈を受けて全体で共有する仕組みだったことから、巨額の金融資産を持つ大金融機関でもあった。そのテンプル騎士団は修道会の一つだったので、総長―管区長―地区組織へ連なるヒエラルキー構造を有した団体である。騎士団は全体として見れば、4 階級のグループで構成されていた。

騎士・・・貴族出身者で重装備
従者・・・平民出身者で軽装備
修道士・・・資産管理
司祭・・・・宗教指導

ドン･キホーテを取り巻く人々もテンプル騎士団を構成する個々の騎士と同じ階層構造をとっている。ドン・キホーテはスペインのラ・マンチャ地方の田舎町の初老の郷士である。郷士は貴族より一段低い身分の人々である。痩せて頬もこけて、見るからに体力も腕力もない初老の郷士だから、彼が騎士になること自体がおかしいのである。しかし、ある日、騎士道による世直しをすると言って、古ぼけた甲冑をかぶり、田舎娘を「思い姫」に仕立てて、痩せ馬ロシナンテにまたがり、従士サンチョ・パンサを伴って諸国遍歴の旅へ出る。騎士道物語の騎士は「スーパーマン」だったが、ドン・キホーテは、当初からひどい時代錯誤に陥った壊れそうな脆弱な体力、劣った技量しかないカッコつきの「騎士」だったのである。

著者のセルバンテスにしてみれば、騎士道物語に狂ったドン・キホーテを世間の物笑いにさらす

ことで、騎士道物語が蔓延するスペインがいかに時代錯誤に陥っているかを告発したかったのだろう。当時のスペインは先陣を切って大航海時代の扉を開き、経済発展を進めて、ヨーロッパ社会でいち早く中世社会から抜け出そうとした国だった。しかし、その経済発展の果実はスペイン王家とセビリアの一部の豪商たちが独占していた。その上、世界制覇の夢も今やオランダやイギリスにとって代わられてしまった。そのため、スペインの庶民の多くは今の暮らしに不満で、古き良き時代だった中世を懐かしむ風潮が色濃く残されていた。だから、スペインの人々の間には、今の不遇を立て直してくれるスーパーマンのような騎士の出現を待ち焦がれるような気分があった。しかし、セルバンテスは、人民の中の古ぼけた甲冑、思い姫、騎士道精神、世直しなどを待ち望む態度は時代遅れで、これからの新しい時代には昔の騎士道など通用しないぞ、と言いたかったのだろう。

(2) 計算違いの思わぬ賞賛がセルバンテスに舞い込む

しかし、「ドン・キホーテ前篇」が出版されると、スペインの人々はセルバンテスの思いとは全く違った反応を示した。そのことをセルバンテスは「後篇」の初めの数章で次のように述べる。

2 回目の遍歴から戻って自宅療養中のドン・キホーテは、見舞いに来たサンチョに問いかける。
サンチョよ、村ではわしのことをどのように噂しているかな？下々の間での評判はどうか、郷士や貴族たちは何と言っているか？わしの勇気、手柄、礼節についてすでに忘れ去られた騎士道をこの世によみがえらせようとしてわしが行ったことについて、どんな評価がされているか？
これにサンチョが次のように答える、まず下々の連中はお前様を大変な狂人といい、郷士たちは田舎の郷士の分際に満足できず、勝手に騎士になろうとしたといい、騎士方は郷士風情が自分たちと肩を並べるなどは無礼千万だと言っている、と。
このサンチョの返事は、とりもなおさず、著者がこの物語を書き始めた時の思いだった。

サンチョとの会話の後、ドン・キホーテは学士のサンソン・カラスコに尋ねる。
「わしのことを描いた物語（「ドン・キホーテ前篇」のこと）があり、それを著したのがモーロ（アラビア人）の賢者というのは本当でござるか」
「本当なんてもんじゃありませんよ。私の睨むところその本はこれまでに 1 万 2 千部の上出版されているはずですからね。嘘だと思うなら、本が出版されているポルトガル、バルセロナ、バレンシアに聞いてみればすぐわかることです。しかも現在アントワープでも印刷中だというわさがあります。・・・名声或いは高き誉に関して言えば、ドン・キホーテ殿は、世にある遍歴の騎士が他すべての栄誉を一人占めしておられますよ。・・・あなた様の凛々しさ。危険に立ち向かうさいの驚嘆すべき勇気、苦境における忍耐力、災難や負傷にもめげぬ堅忍不抜の精神、さらにはあなた様とわれらの姫君ドニャ・ドルシネア・デル・トボーソの間の、いかにも清らかにして禁欲的なプラトニック・ラブを、極めて的確に、まるで目に見えるように活写しているからで

す」（後篇第 3 章、61－62、71－72P. P）

セルバンテスの思惑と違って、スペインの人々は、ドン・キホーテの活躍は、むしろ古き良き時代の復活にみえたようだ。スペインの民衆が、ドン・キホーテを支持したのは、彼の中に自分たちの分身を見たからだろうと思われる。ほんの 30 数年前のことだが、かってスペインの人々は騎士道精神によって武装されたスペイン無敵艦隊によって、新大陸から続々と到着する黄金を手にして、世界中を我が手中に収めていた。現在ではイギリスやオランダの勃興によって世界制覇の夢は壊されてしまっているが、ドン・キホーテのような人が登場して騎士道精神が再興されれば、夢が再来するかもしれないという気分だったに違いない。

（3）狂気と正気の間を彷徨うドン・キホーテ

「前篇」のドン・キホーテは、自ら鎧兜に身を固め、馬にまたがる騎士となって、世界中を歩き回りながら、あらゆる冒険を行って、世の中の不正を取り除き、いかなる危機も克服し、永遠に語り継がれる手柄を立てたいと思っている。

・風車の冒険では巨人に見えた風車に吹き飛ばされる、
・ビスカヤ人との戦いでは妖術師と思い込んで修道士を追い散らす
・冷酷な馬方と出くわして侮辱を受けた時は、こん棒で無残に打ちのめされる、
・城と思い込んだ旅宿で娼婦を追う馬方に気絶させられる、
・羊の群れの冒険では軍勢と思い込んだ羊の群れに踏みにじ

ドルシネア姫の住むエル・トポーソ

三回目の遍歴へ出た主従は、ドルシネア姫が住むエル・トポーソへ向かう。主従はドルシネアの家を探すが、結局サンチョが百姓娘を姫に仕立て上げる。その間のやり取りが格別面白い。

さあサンチョよ、ドルシネアの館へ案内してもらおうか、と主人が言うと、従士は、どんな館へ案内しろと言うんだ、滅相もねえ、この前あの方に出会ったところはほんのちっぽけな家だった・・・、あの方の家は確か袋小路にあったっていっておいたはずですよ、と答える。主人が言う、このたわけ者めが、どこの世界に出口なしの路地に立っている宮殿や王宮があると言うか。従士が言う、旦那様それぞれの土地によって習慣も違うんですよ、どうかおいらにそこいらの通りや横丁を自由に探させて下さいまし、どっかの片隅にその館を見つけねえとも限らないから、と。（後篇（一）第 9 章、147P）

られる、
・死体をめぐる冒険ではペストで死亡した亡骸を運搬する白装束の僧侶を追い散らす
・マンブリーノの兜では床屋から奪った金ダライを兜にする、

これらの話に共通するのは、出会った相手をことごとく巨人、妖術師、冷酷無比な悪人、魔法使いなどと思い込み、彼らをやっつければ良い世の中になるという思い込みである。その際に、従者のサンチョにとってはいつも風車は風車、巨人ではない、修道士は修道士で妖術師でないなどと何度も助言するが、狂気に陥ったドン・キホーテは、現実主義のサンチョの言葉を聞く耳を持たない。

ドン・キホーテの出身地はどこか

ドン･キホーテの故郷の村がどこだったかについては各説がある。作者がそれを避けたためである。ちょうどギリシャの 7 都市がホメロスをめぐって争ったように、ラ・マンチャのすべての町や村が、この郷土を我が息子に、自分たちのものにしようとして争うままにしておきたかったからだ、と著者自身が述べている。

（後篇（三）第 74 章、412Ｐ）

これに対し、後篇のドン・キホーテは違う。三回目の遍歴で、思い姫ドルシネアに会うためにエル・トボーソの町へ行く。サンチョは田舎娘をドルシネア姫に仕立てる芝居を打つが､主人公にはどうみてもラバに乗った田舎娘にしか見えない。その後侯爵夫妻も大芝居を仕掛けるが、やはり主人公にはあるがままに見える。
こうした事態はその後のいくつかの事件でも繰り返される。むしろ逆に、サンチョの方が、魔法使いが思い姫・ドルシネアを醜い田舎娘に変えてしまったと思い込むようになる。サンチョが日ごとに愚かでなくなり、次第に賢明になってきた、とドン・キホーテも言う。主人公との会話が肥料になり、一緒に行動することで乾いた畑が耕されて、次第に良い収穫を得るようになってきた、とサンチョ自身も言うほどになる（後①12 章、192―193Ｐ）。後篇ではこうしてサンチョが次第に狂気じみて、狂気と正気の担い手が逆転していく。

前篇刊行後、約 10 年の空白の後に出版された「後篇」の序文でセルバンテスはいう。
怪しげな姿のドン・キホーテが「続編」の名の下に世間をうろつきまわることによって人々の間にかきたてた不快感や苦々しさを一掃するために一刻も早く本物を旅立たせてくれ､という矢の催促が私の所へ来ている。そうした催促への回答が「後篇」だ。

時代遅れの騎士道にイカれた初老のドン・キホーテは前篇（一，二回目の遍歴）の彼である。後篇（三回目の遍歴）のドン・キホーテは、現実との相克に悩み思案する、懐疑的なドン・キホーテである。こうしてシナリオは急展開する。

4　ドン・キホーテはスペインの運命を戯画化

（1）スペインの黄金時代

スペインは、1492 年にレコンキスタを完了してイベリア半島からイスラム教徒を追放した。レコンキスタは、スペイン人にはあたかも 11 末C以降繰り返されたエルサレム奪回の十字軍遠征の延長戦だった。しかもその戦いに勝利したので、女王イサベルを頂点にしてスペインの騎士道精神に対する熱狂はいやがうえにも高まった。そのレコンキスタが完了した年に、コロンブスが新大陸発見し、スペインを先頭にして大航海時代が始まった。それから 20～30 年後に、中南米でインデイオを酷使して安価かつ大量の銀が採掘されるようになった。ここでも騎士道精神が活躍した。メキシコを侵略したコルテスやペルーを侵略したピサロたちは、騎士道精神によって海を渡り、侵略により黄金を持ち帰った人たちだったからである。

その銀はスペインへ送られた。もちろん植民者たちはタダで本国へ送ったのでなく、その対価として日常的な生活物資、特に需要が多かった薄手の毛織物が送られた。当時スペインは中世以来有名な羊毛生産地だった。イサベラ女王はその羊毛を利用した毛織物生産を奨励し、これが新大陸からの需要によって急速に発展した。

ところが毛織物需要は増加する一方で、次第にスペインだけでは賄いきれなくなった。そこでスペイン商人たちは、ネーデルランドやイギリスの毛織物を買って新大陸へ送るようになった。もともと両国は羊毛生産に関してはスペインの先輩格で、ネーデルランド商人たちがイギリスの羊毛を輸入して、フランダース地方で毛織物生産をしていた。16Cになると、イギリスでも毛織物生産が活発化し、ネーデルランドではイギリスからの羊毛輸入が減ったため、スペインの羊毛を輸入して毛織物生産を行うようになった。ネーデルランド産やイギリス産の毛織物はスペイン産のそれよりも上質で、輸送費を入れても安価だった。

その新大陸からの黄金で武装したスペイン無敵艦隊は、1571 年に「レパントの海戦」を戦う。レパントの海戦は、ギリシアのコリント湾沖でオスマントルコ軍とスペイン、ベネチアを中心とする神聖同盟軍が行った戦争である。勝負はたった 5 時間ほどで片がついて、神聖同盟軍の勝利で終わった。この戦いは、オスマントルコ側では再度の西方進出をかけた戦争だった。これに対して、地中海の覇権をもっていたベネチアが強い危機感を持ち、ローマ教皇ピウス 5 世の仲介で、スペイン・フェリペ 2 世が参加したもので、スペインとイタリア連邦が「神聖同盟」を結んでオスマントルコと対決した。スペインのフェリペ 2 世の弟ドン・ファン・アウストリアを司令官とする艦隊が主力になって戦った。この戦争はガレー船（奴隷の漕ぎ手で動く船）が主力になった最後の戦争でも有名だが、この勝利でイスラムをヨーロッパに続いて地中海からも追い出して、スペインの黄金時代を築く戦争だった。

新大陸貿易の拠点だったセビリアの商人たちは、当初はスペイン産毛織物を銀と交換したが、スペイン産の毛織物が不足したり、高価格で折り合いがつかなくなってくると、ネーデルランド産やイギリス産の毛織物を買って新大陸へ輸出する中継貿易に変わった。外国産毛織物の比重が増えるほど、新大陸の銀はスペインを素通りしてネーデルランドやイギリスへ流れ始めた。その結果、スペインの毛織物工業の衰退が始まり、それが基軸的産業だったためにたちまち関連産業へも波及し、スペイン国民経済に破滅的影響を与えた。この国民経済の衰退はスペイン王室の財政状態をさらに悪化させた。王室は国民に重税を課した。重税は無敵艦隊のような巨大な軍事費や豪勢な王室経費を賄うために必要だったが、国内産業衰退は著しく、王室財政はセビリア商人たちの潤沢な資金に対する依存を一層強めざるを得なくなった。その結果、たとえば彼らが毛織物輸入の方が儲かると言えば最早それを止めることはできる情勢でなくなった。

こうして、16C末のスペインでは、セビリア商人たちが繁栄する一方で、国民経済は衰退した。商人の利潤追求がその国の国民経済全体の利害に相反する形を見せたのだ。1588 年にスペイン無敵艦隊がイギリス軍に敗北したのは、スペインが衰退の坂道を転げ始めた徴(しるし)だった。

端的に言えば、スペインは大航海時代に、騎士道を実直に世の中に再現しようと努めて一旦は世界に冠たる大帝国を形成した。しかし、大西洋市場が開かれて世界貿易が盛んになると、毛織物工業などを国内で地道に育成してきた後続のイギリスやオランダに追い越され、かっての騎士は新興の産業資本家に押されて見る影もなく転落して行った。

(2) セルバンテスはスペインの黄金時代から没落期までの両方を生きた人

セルバンテスは、1547 年にマドリッド郊外で生まれて、24 歳で「レパントの海戦」へ参加した。この戦争で、セルバンテスは、何発かの銃弾を受け「レパントの片手男」の異名をとるほど活躍をした。4 年間兵士を続けて退役した後、船で帰国途上にイスラムの海賊船に襲撃されて捕虜になった（28 歳)。それから 5 年間アルジェで捕虜生活を経て、1580 年、11 年ぶりに 33 歳で帰国した。帰国後宮廷へ戦功報酬を願い出たがかなわず、文筆活動に入る。しかし、それも長く続かず、次にセビリアで無敵艦隊の食糧徴発係になる。1588 年にその無敵艦隊がイギリスに敗れて、失職すると、次に税滞納者の徴税吏になる（41 歳)。ところが、ある時徴収した税金を銀行へ預けていたところ、その銀行が倒産して払出しを受けることが出来なくなり、国費滞納により投獄されてしまう（50 才)。出獄後「ドン・キホーテ」の執筆を初めて、55 歳に時にはほぼ完成する。1604 年出版許可されて、翌 05 年に「ドン・キホーテ（前篇)」が出版されると大評判になった（58 歳)。

こうしてみると、セルバンテスの生涯は、スペインの興隆と衰退の時代と軌を一にしている。レ

パントの海戦とそれに続いた捕虜生活の期間は、スペインの精悍な兵士の一人としてイスラム教徒を地中海から追放するために奮闘し、「騎士」たちと一緒に騎士のような仕事をした。帰国後の放浪生活では、一気に最底辺の庶民の暮らしを体験することになった。だから、スペイン無敵艦隊の敗北でスペイン没落が始まると、セルバンテスもまた没落した。

(3) ドン・キホーテの奇行はスペインの栄光と衰退に対する戯画化

セルバンテスは、「前篇」序文で、この物語を国費滞納により投獄された牢獄で構想したと言っている。若い時は、カトリックの大義のために英雄的行為と称賛されるほど勇敢に戦った戦士だった。その後のうらぶれた生活に比べると、昔の熱狂は純粋だったし、それゆえに美しいものだった。それも当時のスペインが、カトリックによる世界制覇という大きな野望を掲げて戦争を繰り返した時代の最先端にいたのだ。しかし、間もなくそのスペインの野望も急速に衰退していった。自分の生涯はあたかも祖国スペインと同じ運命をたどったのではないか。それにしても馬鹿なことをしたもんだ、でも夢中になってよくやったもんだ、とセルバンテスは獄中で回顧していたのだろうか。

そのセルバンテスの構想の優れた点の一つは、騎士道物語の利用である。
すなわち、セルバンテスの当初の意図は、中世の秩序の象徴である騎士を登場させて、「カトリックの大義」という高熱に浮かされた騎士がスペインを遍歴することにより、カトリックにより世界制覇という夢想がいかに狂気沙汰だったかを反面教師的に教えることだった。

こうしたことは、一途にドン・キホーテが騎士になろうとして努力している様子に見ることが出来る。騎士身分を大事にして絶えず尊敬を得ること、思い姫を大事にすること、弱い者いじめをするものを懲らしめること、巨人や悪魔と勇気をもって対決することなど、騎士が守らねばならない職分や義務について真面目に取り組めば取り組むほど、ドン・キホーテは次々と失敗を繰り返す。だから、サンチョは、「やれやれなんてこった。ご自分のなさることにようく気をおつけなさいましね。あれはただの風車で巨人なんかじゃねえと、おいらが旦那様に言わなかっただかね。」と何度も繰り返さざるを得ない。今の時代に騎士になろうと言うのは、時代錯誤である。騎士として遍歴するなどということは狂気そのものである。だから、サンチョは現実主義の立場からドン・キホーテの狂気に対して、現実をよく見なさいと言って呼びもどすのである。

セルバンテスの構想が優れている第二の点は、メタフィクション（Meta-fiction）の活用である。セルバンテスは、この物語にはアラビア人の歴史家シテ・ハメーテ・ベネンヘーリという原作者がいて、彼がアラビア語で書いた記録をモーロ人がスペイン語に翻訳し、それをセルバンテスがあたかも第2の作者になって編集して出来上がったものだと述べている（第9章、165Ｐ）。

このように架空の作者を設定しておいて第 2 の作者がその語り手になって物語を進めていく手法をメタフィクションという。Meta ＝「より上位」を意味する接頭語で、 Fiction＝「作り話」の意味だから、フィクションをあたかもノンフィクションのように見立てる表現法ということもできる。

また、「後篇」では、「前篇」がすでに出版されて出回っていて、侯爵夫妻のようにそれをすでに読んでいてドン･キホーテやサンチョのファンになった人まで登場させることが出来るようになった。実際にもその侯爵夫妻は数々のいたずらを仕掛けるのである。
さらに、本物はやがて「後篇」として出版されるが、それに先だって偽作が「続編」とい名称で、出版されているという話まで登場する。以下もこの偽作騒動は当時実際にあった話で、今日の我々もそれを読むことが出来るというおまけまでついている。

この手法で、セルバンテスは、原作者から聞いた話だけでなく、たとえば読者のような第三者から聞いた話も原作者に断る必要もなしに、自由に物語へ登場させることが出来るようになった。

このように、メタフィクションの手法の導入で、登場人物の話や行動に幅と厚みが出来ている。それだけでなく、物語では前篇と後篇の間には 10 年の時間の経過があり、登場者に自意識の発展が生じ、人間的にも大きく成長させている。そうして物語の登場者たちは、各々の役割を自覚し、その目標に向かって自発的に行動する個性的な人物に成長している。

主従は、苦労を分かち合いながら遍歴を続け、「銀月の騎士」に敗れて村へ帰る。今わの際に、ドン・キホーテは、これまでの狂気ぶりを反省して死んでいくが、その時に、サンチョはドン・キホーテに、騎士の勝負の勝ち負けは時の運だから、早く良くなってまた遍歴の旅へ出ようと言うほどに、大きく成長した姿をもせるようになってくる。
主従は、遍歴を通して、互いに影響しあって、二人の関係が「主従の関係」から「対等な人なく同士の関係」へ変化してきた様子を見ることが出来る。

5　誇大妄想が世界を巻き込む

（1）サンチョ・パンサは我々の姿ではないか

一回目の遍歴から戻ったドン・キホーテは 2 週間ほど自宅に滞在する。姪や家政婦から悪魔がこれまで読んでいた大量の図書を奪ったと聞いて(実際は彼女たちが騎士道物語はすべて廃棄したり、壁に塗り込めてしまったのだが)、いま最も必要なことは世の中に遍歴の騎士道をよみがえらせることだという思いを一層強くする。そこで騎士叙任式をした城主（実は宿の主人）から教えられたとおり、急いで従者を探して、次の遍歴へ出発しようとする。

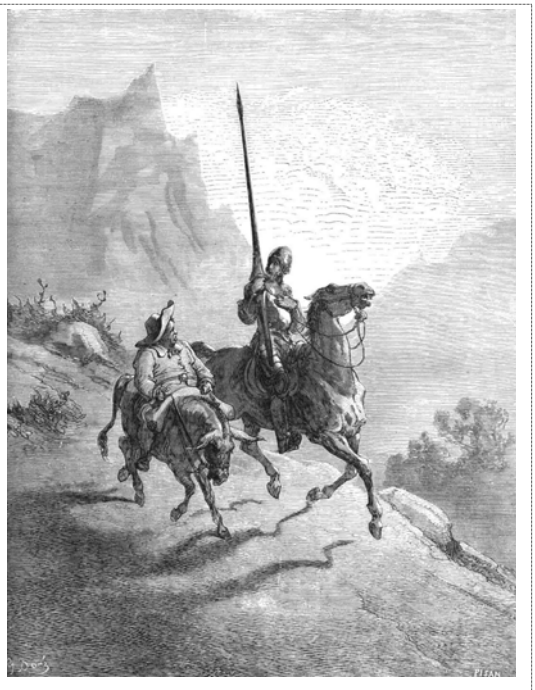
そこで、近所に住む農夫サンチョ・パンサを説得する。
「供をして手柄を立てたら、お前をその島の領主にとりたててやろう。」

これを聞いたサンチョは、いっぺんに舞い上がる。夢も希望もなく毎日野良仕事で妻や子供たちから馬鹿にされていた小心者の頭の中には、王様になって大勢の家来を従える、自分を無能呼ばわりしていた妻が乙女のような初々しさで自分を頼もしそうに見るだろう、などのシーンが次々浮かんでくる。サンチョは夢のような申し出にコロリと参ってしまったのである。

そうした空想は、新大陸へ渡れば黄金郷があって誰もが王さまになれるという妄想を引き起こした。昔この日本でも満州へ行けば大地主になれるといって移民を煽ったこととよく似ている。

主人公はサンチョに言う、昔の遍歴の騎士にならって自分も武力で手に入れた島や王国を従者に分け与えるつもりだ。実はさらにその上を行こうと思っている。昔は従士が年をとるまで待たせたが、自分は 6 日もたたないうちに約束以上のものを苦もなく与えられそうだ、と。

この勧誘で、主人公は夢を語っていたのではなく、ここでは自分自身がお前を王さまにするという「誇大妄想」に陥り、嘘だか真実だか分別つかない状態で喋っているのである。だから、ここは夢を語る場面でなくて、「誇大妄想に陥った狂人」の話と考えるべきところであろう。



ねえ、遍歴の騎士の旦那様、おいらに約束しなさった島のこと、どうか忘れねえで下せえ。おいらは、どれほどでかい島でもちゃんと治めてみせるだからね

（前篇ー 137Ｐ）

この主人公の誇大妄想が、初めは狂人の戯言に過ぎないと思っていた周囲の人々を、次第に巻き込んでいく心理ドラマが、ドン・キホーテの面白さの一つだろうと思われる。そうすると、「島の領主にとりたてる」という一言でコロッと行ってしまったサンチョ・パンサは、単なる「脳なしサンチョ」ではなくて、実は社会の動向に日夜振り回されている我々のような「庶民の代表」と見ることが出来るのではないがろうか。であるとすると、サンチョ・パンサは実は私たちの分身だったということになる。

(2) 三度目の遍歴で妄想に対する騎士と従者の関係が逆転

「ドン・キホーテ」は大長編だが、前篇に比べると後篇が断然面白い。
騎士道物語に書かれていることが真実と信じるドン・キホーテが、現実世界との間で起こす衝突や摩擦、葛藤が前篇（一回目、二回目の遍歴）に描かれる。それに対して後篇（三回目の遍歴）では、彼の冒険が本で出版されていて、道化者としてのドン・キホーテを多くの人々が知っているという条件下で、その周囲の人々がドン・キホーテを妄想の騎士道物語の話の中へ引っ張り込んでいくという具合に変わってくる。

このようにして檻へ入れられ、牛舎に乗せられたドン・キホーテは、遍歴の騎士の伝記で、こんな恰好をして怠惰でのろまな動物により遅々とした足取りで運ばれる騎士など読んだこともない、なんともはや、不可思議なことじゃ。しかし、昨今の騎士道は昔とは違ってきたので、新たな魔法と新たな手段が編み出されたかもしれぬ。（前篇（三）第 47 章 266ｐ）

司祭と床屋の画策で、狂気治療のため牛舎に乗せられた檻に入れられて、主人公は二度目の遍歴から帰郷した。戻ってしばらくの間、静養するが、見舞いに来たサンソン・カラスコから遍歴物語の伝記、すなわち「ドン・キホーテ前篇」がすでに出版されていると聞かされる。ドン・キホーテ主従は、サンソン・カラスコから伝記に書かれた冒険について聞かされる。さらに、その著者が後篇を約束しており、その原稿を探し回っている、と聞いて、主従は三回目の遍歴の旅へ早く出かけることを決める。

出発して最初に向かったのは、思い姫ドルシネアが住むエル・トポーソだった。街の入り口まで

来ると、彼はサンチョに姫を連れてくるように命じる。

「わしは生を受けてからこれまで、比類なきドルシネア姫を拝見したこともなければ、姫の館に足を踏み入れたこともない。ただ、姫がこよなく美しいと同時に思慮深いお方だと言うことを人づてに聞き、噂に聞いて恋い焦がれ、お慕い申し上げておるのだ。・・・（それに対して）お前はわしが持たせた手紙の返事を持ち帰った折に、あの方が小麦を篩にかけておられるのを見た、とはっきり申したではないか」、と主人が言う。
「実を言うとね、あの方のお姿を拝んだって言うのも、あの返事のことも、やっぱり人づてに聞いたことなんでね。だからドルシネア様がどんなお方か言える位なら、この拳固で空にパンチを食らわせることさえできるってもんですよ」、と従士が答える。

姫は元々空想上の人だから、サンチョにも姫がどういう人か見当もつかない。しかし、サンチョは街を歩きながら考える。人は誰から生まれたかじゃなくて、誰と一緒に飯を食っているかが問題だ。サンチョは狂ったご主人の後について仕えるのでご主人の上を行く阿呆ということになる。その主人が風車を巨人、坊さんのラバをラクダ、羊の群れを軍勢という具合に、物を見間違えたり、白を黒と取り違えたりするのだから、従士たる自分もこれから出会う百姓女だといっても許されるだろう。そして主人にその百姓娘が姫と思い込ませることもさほど難しくないだろう。そこで、街から出てきた三人の田舎娘をドルシネアとその侍女と言い張ることにした。

三人の娘を見たドン・キホーテには、田舎娘はやはり田舎娘にしか見えない。「わしにはな、サンチョ、ロバに乗った三人の百姓娘しか見えぬぞ」「やれやれ何てこった・・・お黙りなさいまし、旦那さま。目をよくこすってごらんになり、早くお前様の思い姫を拝みに行くことですよ」

もうこの時にはドン・キホーテもサンチョのかたわらでひざまずき、両の眼を皿のようにして、サンチョが女王様、女王様と呼んだ女の顔を見据えていた。しばらくのちに、彼はいつも自分を迫害する邪な魔法使い目が自分の両目に雲と霞をかけたので、他の人々にはそうではなくても美しい容姿が百姓娘に映っている、と述べ始める。

この光景は、二度目の遍歴の場合と主客が逆転していることを示している。ドン・キホーテにとっては、宿屋は城であり、羊の群れは合戦であり、床屋の持つ金ダライは伝説のマンプリーノの兜であり、村娘は美貌の思い姫ドルシネアに見えた。その時、サンチョは、そうしたドン・キホーテを諫めて、現実に戻らせるのが仕事だった。しかし、三回目の遍歴では、サンチョが妄想を振りまいて、ドン・キホーテが現実の正常心を保つ、という具合に主客が逆転しているのである。主客逆転の下で、ドン・キホーテは、現実が妄想を凌駕しそうになると、「魔法使いの仕業」という切り札が登場して、自分の失敗又は正常心を遍歴の騎士を見舞う苦難に転化していく。

二度目の遍歴の時には、ドン・キホーテの妄想は彼一人が抱いて、それを周囲へ振りまいていたが、三度目の遍歴では、彼の妄想が働かなくなっても、周囲の人々がかってに彼を妄想の騎士道世界へ引きずり込んでいくようになっている。ここでは、ドン・キホーテの妄想を逆手にとって楽しんでみようという意図があるかもしれない。

(3) ドン・キホーテを笑えない

鷹狩の途中に出会った侯爵夫妻によって起こされる数々の事件が面白い。侯爵夫妻はともどもにドン・キホーテ前篇をすでに読んでいたので、滞在中のドン・キホーテに調子を合わせて、騎士道物語の礼式にならっていかにも遍歴の騎士らしくもてなして、数々のいたずらを仕掛ける。

狩猟に出た夜を森の中で迎えると、そこへ魔法の王者メルリンの行列が通りかかり、ドルシネア姫にかけられた魔法を解く方法は、3,300 回のサンチョの尻叩きであると述べられる。当初サンチョは拒否するが、公爵から、尻叩きを受けるか、島の領主をあきらめるかのどちらかを選べと言われて、尻叩きを受け入れて島の領主になる方を選ぶ。

尻叩きを受け入れて、バラタリア島の領主になってサンチョが出発してしまうと、城に残ったドン・キホーテは、ひどい孤独感にさいなまれる。一人になったドン・キホーテは、アルテイシドーラの求愛に悩まされる一方で、突然部屋へ入ってきた数日の猫に引っ掻かれる騒動に巻き込まれる。また老女ロドリゲスの陳情も聞くことになるが、いずれも主人公の孤独を癒すものではなかった。

これに対して、領主に就任したサンチョの活躍に我々は目を見張る。
領内の裁判法廷の看板に「ドン・サンチョ・パンサ」とあると、自分は「ドン」と呼ばれるほど偉くないから肩書をはずせと命じる。その法廷に持ち込まれた事件に対しては、頭巾の注文を受けた仕立てやと客のトラブルではけんか両成敗、借金返済のトラブルでは借主の杖に隠したお金を貸主へ戻して解決し、また、男を手玉にとった女を追放して持ち金を奪われた家畜商人を救う。さらに島の巡視へ出て、賭博場の出口でケンカする二人連れにあうとチップを無心する男を追放する。こうした措置をする目的は、この領内から汚物を吐きだし、怠け者やならず者を追い出して、百姓を保護し、品行方正な者に褒美を与え、協会や聖職者が敬われる社会にするため、とも述べる。このように、領主のように重要な地位についたサンチョが、分別を鋭敏にしてその責務を全うする姿を見ることが出来る。

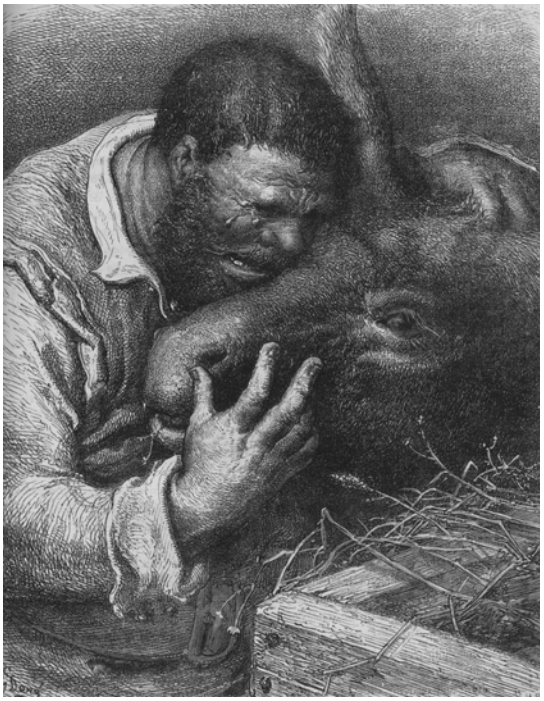
領主になったサンチョと城へ残ったドン・キホーテの間で、往復書簡が交わされる。まず、主人からサンチョ宛の書簡は、
　失敗や無作法を心配していたが、思慮分別があって善政をしているというううわさを聞いてホ

ッとしている。領主になっても人民目線で施策を行い、神、侯爵夫妻への感謝を忘れぬようにせよ。そなたの身辺に起きたことは逐一報告してほしい。また自分はそろそろ今の無為な生活を切り上げる予定だ。

これに対するサンチョの返信は、

忙しく働いている。侍医の厳しい食事制限で空腹と無念に襲われている。公爵の刺客情報は侍医のことではないかと思うほどだ。女房のテレサ・パンサが公爵の奥様から贈り物を頂き感謝している。主人も公爵のご厚意に感謝を忘れるべきでないこと、云々。

ここではすでに主従関係はなくなっているように見える。法廷での裁きを終えた時には、以前の馬鹿で、大食いで、常識のないサンチョはもういない。サンチョの言動や仕事ぶりを記録する係りも、彼を馬鹿とみなすべきか賢明な男とみなすべきか思案に暮れるほどだった。その結果、主人は従士だったサンチョに対して、最早何も指示することがなくなり、対等の二つの人格が現れたと見ることが出来る。



さあ、もっとこっちへ身を寄せな、・・お前の馬具の修繕や飼い葉のことばかりを考えていた頃はおいらは 1 時間 1 時間、毎日毎日、来る年来る年がとても幸せだった。ところがお前を見捨てて、野心と傲慢の塔の上へ登ってからというもの、おいらの魂の中に数限りない悲しみと気苦労、そしてさらに数多くの不安が入り込んだのよ。

しかし、そのサンチョの統治が突然終了させられる。

領主になって 7 日目の夜、何者かにより城が襲撃される。大きな 2 枚の盾で前後を挟まれて亀のように武装させられたサンチョは、大将として戦いの指揮をとる前に、床に倒されて、皆に踏みにじられてしまう。無事敵が退散した後、サンチョは、恐怖、驚き、疲れで気を失う。

しばらくして気がついて、サンチョは次のように述懐する、

「人は生まれに合った仕事をするのいがいい、・・・サンチョは裸で生まれて、今も裸、損もしなけりゃ得もしねえってね。わしは一文無しでこの島を治めに来て、一文無しでこの島を出ていく、つまり、その島の普通の領主たちがどっさりため込んで出て行くのとは大違いだってね。」（後篇（三）53 章、76ｐ）

そうしたサンチョに対して、著者も、かくして彼は思慮に富んだ言葉もさることながら、そのきっぱりとした、しかも賢明な決断に感心してやまない人々のもとを去った、と述べている。

6　死の間際で正気に戻ったドン・キホーテ

（1）ドン・キホーテの偽作と遭遇

侯爵夫妻の屋敷を退出したドン・キホーテとサンチョは、その晩の宿で食事が出来るのを待つ間に、隣室の二人連れから「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ続編」（「ドン・キホーテ」の偽作のこと）の話を聞く（後篇（三）第 59 章 172Ｐ）。

ここで後篇冒頭で紹介された「偽作」の話が登場する。後篇冒頭（序文、11Ｐ）で、これは実際にもあった話だが、1614 年、タラゴーナ市で偽作「ドン・キホーテ続編」（本物のセルバンテスの場合は「ドン・キホーテ後篇」）が出版された。その作者はアロンゾ・フェルナンデス・デ・アベリャネーダという。

その際に、セルバンテスは、偽作者が自分のことを片手男、嫉妬深い男というのはやめてもらいたい。その作者は名前も生国も隠していて公衆の前に姿も見せないので、内面に大きな苦悩をもっているらしい。そのように苦しむ者にさらなる苦悩を与えるべきでないと思うので、あれこれ非難するつもりはない、という。こうした話は「後篇」の序文に書かれている。だから、偽作者へのメッセージは、後篇が完結した後に書き加えられたものと考えられるが、なかなか含蓄ある内容である。

実際にセルバンテスがこの偽作の存在を知ったのは、後篇第 59 章を書いている頃だったと思われる。偽作では、ドン・キホーテはドルシネア姫への恋から覚めた男になり、サンチョは大食い、愚か、愛嬌がない人物になり下がっている。これに対して、セルバンテスが描くドン・キホーテは、勇敢で思慮分別に富み恋に悩む騎士で、サンチョは単純だが気のきいた従者であると、と改めてサンチョに言わせている。そのうえで、偽作を書いた男は主従の名声を横取りし、手柄を台無しにしようとしているようだ、という。（後篇第 59 章、178Ｐ）

その数日後、街を散歩していた主従は、とある印刷屋を見つける。中へ入り、印刷、活字組みなどの工程を見ていくうちに最後に校正の部屋に来た。すると、なんと「ドン・キホーテ続編」その者が校正中だった。主人は、とっくにその本は焼かれていると思っていたので驚き、憮然とした表情で退出する。最後に、自分の「後篇」が出版されれば、偽作などは自然と淘汰されて、焼却される時がやって来るだろうと言う。（後篇第 62 章、251Ｐ）

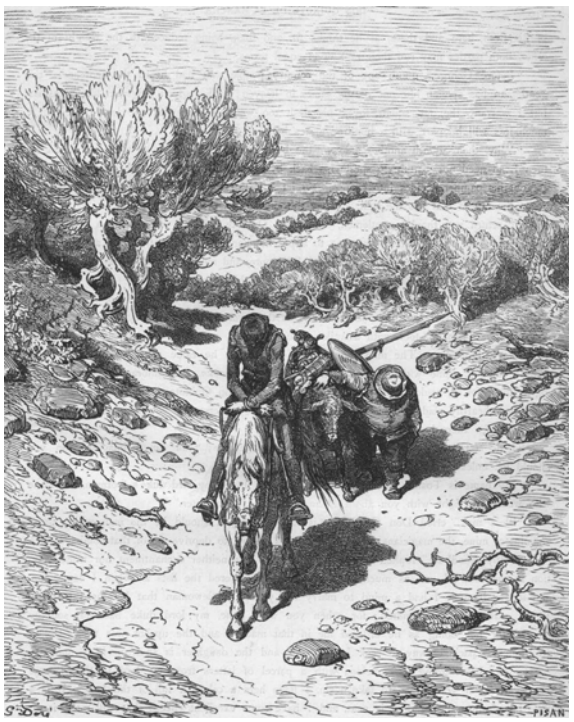
最後に、その偽作の中で、主従はこれからどこへ行こうとしているかと聞くと、サラサーゴの馬上槍試合へ出る予定という。そこで、本物の主従は急きょ方向を変えて、バルセロナの馬上槍試合へ出ることになる。

「後篇」では、「前篇」を読んで、主従の冒険を知った人たちが、様々な妄想話を作り上げて主従をそこへ引きずり込んでいく。そこへ今度は、「偽作」話も登場する。後篇（三）第 59 章では、その偽作の現物に遭遇しただけでなく、偽作の印刷工場にまで立ち寄っている。これらのことは、当時のスペインでは相変わらず騎士道にあこがれや懐かしさを覚えている人が多くいて、騎士道物語を多くの人々が好んで読もうとしていることの表れと見ることが出来るだろう。著者のセルバンテスは、ここで悪乗りをして、偽作では主従がサラゴサの馬上槍試合へ行くようになっていると聞くと、それなら本物は違う場所へ行かせようと言う茶目っ気を出して、急きょバルセロナの馬上槍試合へ出るように話を変更しているのが面白い。

偽作についてセルバンテスは、自分の「後篇」が発表されれば、偽作などはおのずと焼却場行きになるだろうと落ち着き払っているのが印象的である。
こういう入り組んだ叙述が出来るのは、メタフィクション手法が使われているためだろうと思うが、「偽作」がサラゴサの馬上槍試合へ行こうとしていると聞くと、本物の主従は、前篇の予告にもかかわらず、急きょバルセロナの馬上槍試合へ出るように方針転換をするのが面白い。

（2）銀月の騎士との決闘に敗れて、故郷へ帰る

さて、そのバルセロナで、海岸を散歩中に「銀月の騎士」（実は学士のサンソン・カラスコが変装）に出会う。「銀月の騎士」の思い姫の方がドルシネア姫より美しいことを認めさせたいと言って決闘を申し込まれる。ドン・キホーテが負けたら武器を捨てて一年間故郷へ引きこもること、自分が負けたら武勲も譲るという条件で決闘する。勝負は、両者がとった間隔の 3 分の 2 くらい走ったところで激しくぶつかり、ドン・キホーテとロシナンテが人馬もろとも地面にたたきつけられて、敗北する。



要するにわしは無謀な戦いを挑み、出来るだけのことはしたが、打ち倒されたのじゃ。しかし、名誉は失ったが、約束を守るという美徳は失わない。（後篇（三）298Ｐ）

銀月の騎士として勝利したサンソン・カラスコは、決闘直後に、バルセロナの金持ちドンアントニオに正体を明かして、決闘の動機を説明する。同じ村の友人として、あの狂態を残念に思ってきた。あの病気には静養が一番

で村へ帰す手立てを考えた。二度目の遍歴では、檻に入れて強制的に村へ戻らせたが、すぐ三度目の遍歴へ出てしまった。そこで今度は、決闘で相手を傷つけずに倒して、騎士道の掟に従って条件を守らせる方法をとることにした。

この「銀月の騎士」の説明に対し、ドン・アントニオは、愉快な狂人を正気に戻したら、世間が許さないといって反対する。ドン・キホーテの狂気が与えた喜びは、正気の場合に比べて比較にならないほど多い。主人だけでなく、サンチョのご愛嬌もまた見られなくなる、と言う。

しかし、ドン・キホーテは決闘に敗れて、約束通り、武装を解いて旅人姿で甲冑や武器をロバに乗せて帰郷する。その道中は、決闘に敗れた苦しみやドルシネア姫に会えぬ悲哀でふさぎこむが、やがて約束の 1 年間は羊飼いとして暮らすと決意する。

その途中、再度侯爵夫妻のいたずらで城へ連れ戻される。敗北して傷心のドン・キホーテに恋をしたアルテシドーラに再度言い寄らせるが、主人の心は変わらない。そして、サンチョにドルシネア姫の魔法を解くために早く尻打ちの刑に服するようにしかける。

(3)　ドン・キホーテの死

故郷に帰ったドン・キホーテは、その後、ひどい熱病になって 6 日間寝たままになり、医者も生命の危機を宣言するほどになってしまう。

最終の第 74 章は、主人公の告解で始まる。
その冒頭で、「人間に関わることで永遠なるものは何一つなく、すべてはその初めから最後に至るまで、常に下降を続けていく」、とセルバンテスは書き始める。(後篇 (三) 第 74 章、400Ｐ)。しばらくあとで、「去年の古巣に今年は鳥はいない」と同じようなこともいう。その意味合いは、以前の自分は「狂人のドン・キホーテ・ラ・マンチャ」だったが、今は「正気のアロンソ・キハーノ」に戻った事を言うのだが、それに止まらず、今はそのキハーノ自身も死んでいこうとしていると述べているように思われる。

死の床で、姪に向けて言う、
「神のお慈悲の何と広大無辺なことか、・・・わしが犯した数々の罪もそのお慈悲の妨げにはならなかったのじゃ。おかげで、わしは今や曇りのない理性を取り戻し、あのおぞましい騎士道物語を読みふけったために頭にかかっていた無智と言う黒々とした霧もすっかり晴れたのじゃ。いまではああした物語がいかに荒唐無稽で、まやかしに満ちているかはっきり認めることが出来る。・・・姪よ、わしはもうすぐ死ぬが、せめて死に至るまで狂人だったという評判を残すほどわしの生涯が不幸だったわけではないことを、人に分かってもらえるような死に方をしたいと思う。

つまり、なるほどわしは狂人だったが、今わの際にその事実を認めたくない。ついては告解をして遺言書をつくる・・・」（同上 402Ｐ）

これまで従士サンチョをはじめ周囲の人々は口をそろえて、ドン・キホーテが狂気に陥っていると言っていたが、本人はこれまで一度も自らの狂気を口にしたことはなかった。しかし、最終章の死の床で初めて自身の狂気について、告白する。そしてサンチョに対しても、
「私が狂人だった時、彼（サンチョ）を島の領主にするために努力したが、正気に戻った今でも出きることなら、彼に一国の支配でさえをゆだねたいと思っている。実に彼の単純で率直な性格と誠実な人柄は十分それに値するからである。友のサンチョよ、どうか許しておくれ。この世に遍歴の騎士がかって存在し、今も存在すると言う、わしの陥っていた考えにお前を陥れ、わしだけでなくお前まで狂人と思われるようなふるまいをさせて、本当にすまなかった。」

サンチョは、「ああ旦那さま、どうか死なねえで下さいよ。・・・おいらの大事な旦那さま、この世で人間がしでかす一番でかい狂気沙汰は、別に大した理由もなければだれに殺されるってわけでもねえのに、ただ悲しいとか侘しいとか言って死に急ぐことですよ・・・騎士の勝負の勝ち負けは時の運だから、早く元気になってまた遍歴の旅へ出よう」、という。

ここにいるサンチョは、最早、主人と従士、主人と家来の上下関係ではなくて、これまで苦労を共にしてきた戦友のような対等の友人関係であるように思われる。それにしても主人が従士に詫び、従士がその主人に返す言葉は何と我々を泣かせるセリフではないか。

その後、臨終の床で、ドン・キホーテはスペイン中に蔓延している「騎士道物語」あるいは「騎士道精神」に対して、決別宣言をする。遺言状は、まず、姪のアントニアに対して、
「私が所有する財産は姪のアントニア・キハーナに贈る。・・・アントニア・キハーナの結婚に関しては、まず相手が騎士道物語とは何であるかさえ知らない男であることを確認したうえで結婚すべし、と言うのが私の意志である。もし相手が騎士道物語を知っていることが判明したにもかかわらず、姪がその男との結婚を望み、結婚した場合は、彼女は私から寄贈された財産のすべてを失うものとする」この騎士道を憎む気持ちは、上記のサンチョに対して詫びた時の、荒唐無稽でまやかしに満ちた世界を憎む気持ちと同様の趣旨だろうと思われる。

続いて、例の偽作について、
「遺言執行人にぜひともお願いしたのは、万が一にも「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの武勲　続編」の題で出回っている物語（「偽作」のこと）の作者に会う機会があったら、私になりかわって出来るだけ丁重に詫びていただきたい。知らなかったとはいえ、あの本に書かれているような途方もないでたらめを彼に書かせる契機となったのは私だから、どうか許してもらいたいと、言ってほしいのです」（後篇　第 74 章　410Ｐ）。

「偽作」が発行されていることは、騎士道物語がスペイン中に広く蔓延していることの反映だと主人公には見えたようだ。「偽作」自体については、主人は、部分的なミスがあると指摘するに過ぎない。しかし、「偽作」が出回るほど、騎士道物語がスペイン中に受け入れられていることの方が、主人にとっては恐ろしい事態と思われた。

やがて型通りの秘跡をうけ、さらに的確な言葉を連ねて口を極めて騎士道物語を呪った後、遂にドン・キホーテは最期を迎えた。公証人は、ドン・キホーテのようにゆったりと、以下にもキリスト教徒らしい大往生を遂げた遍歴の騎士には、これまでいかなる騎士道物語においても出会ったことがないと断言した。かくしてドン・キホーテは、その場に居合わせた人々の深い同情と涙に見守られながら、その魂を神にささげた。つまり死んだのである。（後篇（三）74 章 410ｐ）

騎士道物語について自分は、もう昔の話で今のスペインではあってはならい物語だと思い、騎士道物語に心酔した「狂人」の話を述べてきた。しかし、その結果は、思いとは反対に、好評になって人々が面白がって狂人の話を続けさせようとするほどになっている。「狂人」をやめようとしたのは故郷の姪と家政婦、司祭と床屋、そして学士のカラスコぐらいしかいなかった。後の人々は、皆ドン・キホーテの狂気を、二度とあってはならない、聞きたくもない話にせず、面白がってもっとやれと囃す人々ばかりだった。その典型例が侯爵夫妻、バルセロナのドン・アントニオ・モレーノなどだった。

遺言状作成から 3 日後に、口を極めて騎士道物語を呪った後死を受け入れ、いかにもキリスト教徒らしい大往生を遂げた。そして死を見届けた司祭は、ドン・キホーテは天寿を全うしたと書きつけて、別のだれかが今後ドン・キホーテをよみがえらせて果てしなく武勇伝が続く可能性を失くしたい、という。

なぜか。これまで大勢の遍歴の騎士たちが演じてきた愚行は、ドン・キホーテが三度の遍歴で見せた数々の愚行とそれを読んだり聞いたりした国内と全世界の人々の好評と喝采だけで十分だ。これで人を惑わす騎士道物語の流行は完全に打ち止めにする、といって次のように結んでいる。「余の願望は、騎士道物語に描かれたでっち上げの支離滅裂な話を、世の人々が嫌悪するように仕向ける以外になく、それらが、我が真実のドン・キホーテの物語の出現によってすでによろめいているから、おっつけ完全に倒れるだろう事は疑問の余地もない。さようなら」（415Ｐ）